

# 1歳8か月の時点で食道異物を契機に発見された 先天性食道狭窄症の女児例

渡邊綱之輔 坂口 崇 後藤 綾子  
宮本 辰樹 永光信一郎

福岡大学医学部小児科

要旨：先天性食道狭窄症は離乳食開始時期である6か月前後に嘔吐と嚥下困難で発症することが多い。今回我々は1歳8か月で食道異物を契機に発症した非典型例を経験した。症例は1歳8か月女児。X-2日夕食時にウインナーを摂取し、以降食直後の嘔吐を反復した。X日も嘔吐が持続し前医を受診、浣腸、輸液、制吐剤の投与を行われたが症状は改善せず、同日当科に入院した。絶食輸液管理を行い嘔吐は消失したが、経口摂取再開後より再び嘔吐するようになった。X+2日の食道造影検査で中下部に円形の造影欠損域、その遠位側に狭窄を認め、食道異物、先天性食道狭窄症と診断した。バルーンカテーテルを挿入し1.8×1.2cmのウインナー片を牽引摘出、以降嘔吐の再発なく経過した。後日、当院小児外科に再入院し上部消化管内視鏡検査を施行した。食道下部に狭窄を認め、同部位をバルーン拡張した。以降現在（3歳）まで再発なく経過している。先天性食道狭窄症は通常離乳食開始時期に発見されることが多いが、本症例のように遅れて発見される場合もある。食直後に嘔吐を反復する症例では、年齢に関わらず先天性食道狭窄症を鑑別に挙げる必要がある。

キーワード：先天性食道狭窄症，食道異物，嘔吐症，食道造影，上部消化管内視鏡